

初中級クラスへの iPod の導入

INTRODUCING IPODS TO THE ELEMENTARY AND INTERMEDIATE
JAPANESE COURSES

山本かすみ 平井美香 ウィリアムズカレッジ
Kasumi Yamamoto and Mika Hirai, Williams College

Abstract: Williams College has introduced iPods (nano and video) to the non-advanced level Japanese courses since fall 2005. We prepared audio files for model conversations, pattern practice drills, vocabularies, as well as text files accompanying those audio materials for iPod nano. Furthermore, we created video files for the model conversations and kanji stroke movies as an addition for video iPod. This study discusses the findings from the students surveys conducted through three consecutive semesters.

Keyword: Mobile Assisted Language Learning (MALL), iPods, Technology-driven Pedagogy, Language Learning Tools, Japanese Language Pedagogy

はじめに

英語を母国語とする学習者にとり、日本語は習得に尤も時間のかかる外国語の一つと考えられている。このような日本語を大学教育の限られた四年間で習得するには、より効果的で効率の高い学習が必要とされ、テクノロジーの活用はもはや必須のものとなっている。筆者は、iPod の携帯性と学習者への心理的効果に注目し次の2点を目的として初級日本語クラスに iPod を導入した。1) 日本語に接する時間を少しでも増やす。2) 音声ファイルを使って練習する学習習慣を付ける。当初、モデル会話、語彙、ドリルの音声ファイルを装備した iPod nano を二学期間に渡り、初級学習者に任意に貸し出したところ、学習者は従来のコンピューターを使っての練習に加え、iPod の携帯性を効果的に利用し音声ファイルを使った練習をこなしている事がわかった。これに基づき、音声に加え、会話ビデオ、その日本語テキスト、さらに漢字かなムービーも入れた iPod を中級クラスにも貸し出す事にした。本稿では、2種類の学習経験（デスクトップコンピューターのみの場合とコンピューターと iPod の両方を使った場合）を持つ中級学習者のアンケート結果も考慮し、iPod の初中級日本語学習における利用方法とその限界、また iPod がはたして学習パターンに変化をもたらすのかどうか、考察したい。

調査結果

2005年秋に iPod nano を初級日本語クラスに導入して以来、3学期に渡り使用調査を行ったところ（2005年秋は1年生11人、2006年春は1年生10人、2006年秋は1年生5人、2年生6人、3年生7人計18人がアンケート調査に回答している）、毎学期9割の学生が日本語学習に iPod を使用しており、その全員が iPod の継続使用を希望している。この結果から、学習者にとって iPod が日本語学習に非常に大切な役割を果たしている事が考えられる。

実際にどのような頻度で使っているか3回の調査をまとめてみると、週5回以上（27%）週3-4回（29%）週1-3（36%）という結果が出ており、また時間数は一回につき、1-2時間（24%）、1時間（56%）、30分（12%）という内容だった。使用頻度にばらつきがあるのは iPod が Blackboard と併用して使われており、基本的な学習は Blackboard を通して行われ、iPod はあくまでその携帯性を重視して使用されているから

であろう。2006年秋の調査では日本語学習全体の6割にBlackboardが利用され、4割にiPodが利用されているという結果が出ている。本来、Blackboardのファイルのほうが充実していること、また声を出してインターラクティブに練習できることから、学習の基盤はBlackboardとし、iPodはあくまでも補助的なツールとして学習環境を整えるために導入するのが目的であったので、これはむしろ歓迎されるべき結果と考えている。またどのような環境でiPodを使用しているのかについては、自分の部屋、図書館、移動中、待ち時間、ジムでという回答が多かった。

さて、学生の要望に応じて、2006年秋には動画、テキストファイルも加えたが、5（利用価値が高い）から1（利用価値が低い）のスケールで各ファイルの有効性を聞いたところ、次のような順位となって現れた。ドリルの音声(4.94)、モデル会話の映像(4.72)、モデル会話の音声(4.27)、Eaves Dropping（聴解練習問題）の音声(3.75)、Utilization（構文練習問題）の音声(3.73)、語彙音声(3.5)、漢字書き順ムービー(2.85)。また、モデル会話、語彙、ドリルのテキストは半数以上の学生が利用していない事が分かった。2006年の秋に初めてiPodを使用した3年生のうち3人は学習パターンが改善されたと答え、2人は変化なしという回答だった。改善された理由として、ドリルを練習する頻度が増えたこと、聴き取り練習や構文練習の宿題がしやすくなったこと、漢字の書き順が確かめやすくなった事があげられた。

まとめと考察

3学期に渡ってiPodを補助機器として使用して来たが、今やiPodは学生にとって欠かせない学習ツールの一つになっている。当初、iPodがBlackboardに取って代わり、自分の声をモニターしながら練習する習慣がなくなるのではないか、インターラクティブな練習の時間が減るのではないかということが懸念されたが、学習者はそれぞれの機器の特異性を見極め、自分の学習スタイル、学習環境に沿って、iPodとBlackboardをうまく使い分けて自習に役立てていることが分かった。特にiPodは音声ファイルの使用、さらに単発に繰り返し練習できるものには最適で、そのためパターンドリルの練習、またクラス直前にその日の会話の内容をチェックする為に一番良く使われたようだ。反対に、音声に対応したテキストも歌詞登載の機能を利用して載せたものの、テキストファイルはあまり利用されなかったことから、テキストを必要とするような学習は、別の環境で行なわれていると考えられる。また、画面の大きさから考えて教科書を参考にした方がいいというのも当然なことだろう。

iPodを使用した事でどれだけ言語習得に効果があったのかは、客観的に計測する手段がないために論じることはできない。しかし、テクノロジーの発達に伴い学習者がニーズにあった学習方法が選択でき、それにより言語学習が促進されることは多いに歓迎されるべきことではないだろうか。ただし、Colpaert (2004)が指摘しているように、mobile technologyを導入する以前に学習環境を整備していく事、テクノロジーではなく学習者に焦点を当てる事を強調する事が非常に重要なことである。また、テクノロジー自体は教師に取って代わる物ではなく教授用のツールである(Chinnery, 2006)ということも明記しておかなければならない。しっかりしたカリキュラムの中で、iPodをどういう形で活用していくかを教師はたえず考慮していく必要があると同時に学生に聴き取り、セルフモニタリング、発話の自動化を促進するにはどういう練習が必要なのか指導していくことも忘れてはならない。

参考文献

- Chinnery, G. (2006). Emergin technologies, going to the MALL: Mobile Assisted Language Learning, *Language Learning & Technology*, 10, 9-16.
 Colpaert, J. (2004). From courseware to coursewear? *Computer Assisted Language Learning*, 17(3-4), 261-266